人文・自然・人間科学研究　No. 49, pp. 156–183　　March 2023

小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦）の化学，医学，英学修業

── 伝記『金蘭簿物語』の出生から渡米までの記述の検証

塩　崎　　智

A Verification of the Biography of Suzuhiko Tsukagoshi, from His Birth in Ohta to His Arrival in San Francisco

── Focusing on His Study of Chemistry, Medicine and English

Satoshi SHIOZAKI

要　旨

1870 年 6 月に横浜から出航し，サンフランシスコに向かった船に，8 人の日本人が乗っていた。そのうちの 1 人の塚越酸素彦は，伝記が存在し，現在の群馬県太田市出身の平民で，小浜藩に英学教師として雇われていたことが分かった。

本稿では，塚越の伝記の記述内容を，出生から江戸，横浜，江戸（牛込矢来），小浜のそれぞれの時代に分けて，関連史料を使い事実確認を行った。その結果，蘭学から英学への移行の様子，米国人宣教師等に英語を学ぶために全国から横浜に集まってきていた英学生コミュニティの存在等，幕末維新期の英語を巡る興味深い史実が明らかになった。

キーワード：横浜の英学，化学医学修業，小浜藩，米国留学

はじめに

前稿では，群馬県太田市出身の小浜藩英学教師，塚越酸素彦（1842–1886）の全人生を，塚越の次男丘二郎による伝記『金蘭簿物語』の記述を基に概観し，塚越が雇われた小浜藩に残る英書と塚越の関係について，先行研究を検証する形で論述した。本稿では，時系列的に『金蘭簿物語』の内容を紹介しつつ，史料として検証する形で記述を進める。紙幅の関係もあり，今回は塚越が生まれてから 1870 年に渡米するまでの，江戸，横浜，江戸（牛込矢来），小浜の各時代を扱う。史料は可能な限り原文を引用するが，内容とその理解に影響を与えない範囲で，漢字の記述等現代的なものに変える場合がある。

1. 塚越の交友関係と「恩人」

本稿が主に扱う期間は，塚越の出生から渡米までの，太田，江戸，横浜，江戸（牛込矢来），小浜に居住していた時期である。

『金蘭簿物語』では，塚越にとって重要と思われる人物，あるいは著者丘二郎が塚越の「恩人」として特別に扱っている人物が何人かいる。本論に入る前に，塚越酸素彦という人物の理解の一助になると思い，塚越と深い関係があった人物を，最初にまとめておく。

まず，『金蘭簿物語』の序の執筆を担当したのは，塚越がサンフランシスコ（以降，SF と表記）で知り合った**久保田貫一（1850-1942）**である。久保田は豊岡藩出身で，外務省，内務省等で官僚として勤務した後，埼玉県等の知事となった。久保田は官僚になる前に渡米し，SF 滞在時代に塚越の世話になったようだ。本稿で扱う時期には登場しない。その久保田の序によると，塚越の「知己朋友」として，**星亨（1850-1901）**，**濱尾新（1849-1925）**，**福地源一郎（1841-1906）**が挙げられている。本稿では横浜，小浜時代を，英学教師としてともに過ごした星が登場する。

太田から江戸に出てきて，塚越が世話になった人物として，幕臣の**山岡鉄舟（1836-1888）**が登場する。江戸から横浜に移った時に，山岡から紹介されたのが幕臣の**多田元吉（1829-1896）**で，『金蘭簿物語』でふれられている塚越の碑文は多田の筆によるものである。多田は上総国富津出身で，後に幕臣となり，明治になってからは慶喜に従って静岡に移り，茶の栽培で活躍した。塚越との深い交流は，生涯に渡って続いた。

横浜で塚越は小浜藩に英学教師として雇われ，江戸の牛込矢来の藩邸で藩士に英語を教えることになる。この際，塚越を推挙したのは**小浜藩士池田正吉（生没年不明）**である。そして，塚越が近所の知り合いだった星亨に声を掛け，星も小浜藩の英学教師として雇われた。二人はその後，江戸から小浜城下に移る事になった。

塚越は 1870 年に渡米するが，その時に塚越が知人から受け取った，送別の書簡や詩歌が『金蘭簿物語』に掲載されている。書簡は，**塚原周造（1847-1927）**と星からの文面が引用されている。後述するが，横浜在住時代に塚越，星とともに撮影した写真が，塚原の伝記に掲載されている。『金蘭簿物語』では塚越と塚原の交際に関する記述は限られているが，塚原は横浜時代の塚越を理解するキーパーソンではないかと推察している。

『金蘭簿物語』に収録された渡米送別の詩歌の送り主の中で，**小浜藩士井阪静太郎（生没年不明）**とは「平生別懇」の間柄と書かれていて，塚越も歌を井阪に返している。前出の池田とともに，塚越と小浜を結びつける人物である。

『金蘭簿物語』の登場人物の中で，塚越と特に関係が深かったと思われる人物は以上である。太田の一平民の人脈とは思えない拡がりを見せていることが分かる。

2. 出生，新田郡太田（1842–1861）── 学問，読書好きの平民分家の二男

『金蘭簿物語』第 2 章「生家と郷里」pp. 2–6

塚越は，上野国新田郡太田町（現在，群馬県太田市）出身で 1842 年生である。寅之助，良之助（小浜藩に雇用されるまでの在江戸，横浜時代），酸素（すず）彦（小浜藩時代），鈴彦（渡米以後，すずひこ）と名乗った。

塚越家に関しては，以下の記述がある。酸素彦の塚越家は，始祖は酸素彦の祖父彌兵衛，父も同じ彌兵衛である。

> 「塚越家は上野国に於て新田氏以来の旧家で其の祖先は新田氏の有力な臣下の一人であった。近世に至り，寛政文化頃の当主に**塚越次郎左衛門高豊**と言える者があったが，其の弟**彌兵衛**が分れて一家をなした。是れ余が父**鈴彦の祖父**である。**其の嗣子同じく彌兵衛**は下野国佐野町平民飯田友右エ門長女**シゲ**を娶り，二男二女を生んだ。長男を彌平と言い，二男は即ち余の父である。右のシゲ女は 41 歳で没した。その時父は僅かに 13 歳であったと言う。後，彌兵衛は後添を迎え，忠七，**禮三郎**及び政蔵の三子を設けた。忠七は松本家に入って，其の姓を冒す事となった。
>
> 塚越家は前記の如く新田氏以来の旧家で其の名は可成近郷に聞えた。徳川 5 代将軍綱吉公が未だ上州館林に在りし頃，其の家に臨まれ，数々の品を賜った事がある。（中略）家柄はかく相当で資産もあったが，幕末に及び歴代の当主が，平生華美を好み且つ頗る任侠の風があった為財を散じて家運漸く衰頽に瀕し，父が生長する頃には著しく産が傾いた。又父の生家は本家に比すれば素より微々たるものであった故，旁父は年少時代から何かに依って自ら身を立てねばならぬ境涯にあったのである。」（『金梅蘭物語』pp. 5–6, 太字は筆者による）

以上の記述の内容を順番に検証する。

(1) 塚越家と新田氏との関係

太田に関する歴史的記述をまとめた『金山太田誌』（p. 132）に，1583（天正 11）年金山籠城の際，「譜代の臣塚越九八郎討死」という記述がある。

詳細な出典は不明だが，群馬の塚越家と塚越九八郎に関しては，以下の情報がある[(1)]。群馬県の塚越家の大半は清和源氏の子孫とされ，初代は新田義貞の二男義興の末裔とい

う塚越尾張守と言われる。尾張守は現在の群馬県太田市新田反町町に住んで新田本家に仕えていたが，天正年間（1573-1592）塚越九八郎のとき太田市由良へ移り，地元の豪族由良氏の家臣となった。現太田市に城跡が残る金山城は由良氏の居城だった。江戸時代になると帰農して名主を務めた。

塚越九八郎と酸素彦の祖先，塚越次郎左衛門高豊の関係は不明だが，塚越家は新田氏との浅からぬ縁があり，江戸時代には士族では無く，名主という豊かな家だったことが概ね確認される。

⑵　5代将軍綱吉と太田の関係

金山城跡一帯は，江戸時代，明治時代に松茸の名産地として知られ，将軍，天皇家へ年々献上していた[2]。新田義重は徳川の祖先に当たり，家康は新田氏のために大光院を創建し，金山一帯が天領となった。この周辺の松林では，香りも味覚も優れた松茸が取れたため，一帯は御料林に指定され，その監視の守護役が置かれた。5代将軍綱吉の時に，その首役は名字帯刀を許され，80人程で手分けして御料林を監視していたと言う。

太田の金山一帯と徳川家が特殊な関係にあったことが分かるが，松茸と塚越家との関係は不明である。

なお，5代将軍綱吉は江戸で生まれ1861年に館林城主にはなったが，江戸住まいだった。綱吉と塚越家に関する記述を裏付ける史料は今のところ無い。

⑶　塚越家本家と分家

『金山太田誌』（p. 152）によると，太田古百姓と呼ばれた家柄が10程あり太田の町政を掌握していた。その一人に塚越一郎が挙げられているが，塚越本家との関係は分かっていない。

塚越の祖父を始祖とする塚越家分家の具体的な職業も不明である。塚越が若かった時，農業（松茸との関係は不明）の見張りを命じられていたと『金蘭簿物語』（p. 7）に書かれている。

塚越の異母弟に当たる禮三郎は，1904年3月の太田町営業便覧に，足袋商塚越屋として，久太郎とともに名前が出ている。

『金山太田誌』（p. 351）に塚越鈴彦ノ碑が掲載され，施主は塚越久太郎となっている。塚越の長男は卯太郎である。久太郎と塚越家分家の関係は不明であるが，塚越が上京した後の塚越家分家は足袋商を営んでいたと考えてよさそうだ。

塚越家分家に嫁に来た女性は，地元ではなく，近隣の佐野や伊勢崎在住の女性だった。塚越分家が，広い付き合いを持った，それなりの家格であったことを示している。

3. 江戸での生活（1861-1865）── 昌平黌で漢学，幕臣山岡鉄舟，蘭方医伊東玄朴との出会い

『金蘭簿物語』第 3 章「勉学」pp. 7-10

塚越が江戸に出て昌平黌に学んだ経緯は以下の通りである。

「上野国太田は所謂天領と称して幕府の直轄地であり，且つ田舎の小さい町に過ぎないから学問の隆昌には縁がなかった。父は斯くの如き土地に平民の家に生まれたので勉学上に資すべき事情に乏しかった。唯彼の祖母チカ（伊勢崎高山氏の女）は女性ながら学問が好きで平素書籍に親しんだので，其の感化が孫たる父に及んだと言う事である。要するに父は最初寺子屋で学問の手ほどきを受けた丈であったらしい。（中略）彼は田舎にいては到底志を達することが出来ぬので，終に意を決して江戸に出て，先ず昌平黌に入る事になった。それは 1861（文久元）年 20 歳の時である。

而も幾干もなく郷里よりの学資の支給が絶えたので勉学上，一頓挫を来した。蓋し本家の家運が傾くとともに一族の者も窮迫して余裕なきに至ったからであろう。斯くて父は遺憾ながら昌平黌を去らざるを得なかった。」（『金蘭簿物語』pp. 6-8）[3]

昌平坂学問所入学に関しては，『金蘭簿物語』（p. 6）に塚越本家が「帯刀御免の家柄」だったからと書かれている。この塚越家の半士族扱いが金山松茸の管理に由来するかどうかは，先述したように不明である。

昌平坂学問所は，幕府直轄の旗本とその子弟の教育機関だったが，諸藩士や浪人にも門戸が開かれていた。全国から俊英が集っていたと言われる。1845（弘化 3）年から 1865（慶應元）年の間に入寮していた学生 504 人の名簿が残っているが，そこには塚越の名前は無い[4]。入学する前の予備校的存在だった林家の私塾の書生氏名にも塚越の名前は見当たらない[5]。士族では無い塚越が，士族の陪臣という形で姓名を変えて入学していた可能性はある。

昌平坂学問所では，町民，農民を問わず，講義を聞く機会も設けられていた（仰高門日講）ので，塚越はそこに参加して学んでいた可能性もある。いずれにしても，塚越の江戸での学問は漢学からスタートしたものの，実家の経済的な理由で頓挫した。その後の塚越の様子は以下の通りである。江戸に出た塚越の関心は，漢学から化学，医学，そのための英学へと移っていく。

「小浜藩に召抱えらるる迄，約七年間，あらゆる艱難辛苦を嘗めた。或る時は医師の玄関番となって薬切をなし，当時有名の漢方医（ママ）伊東玄朴の厄介にもなり，或いは山岡鉄舟の門下ともなり，新徴組の中にも加わったことがある。

初め父は漢籍を修めた。然しその志は他の方面にあった。「金蘭簿」中に明治8年8月附除籍願書の写しというのがあるが，その文中「右の者十四カ年以前郷里を去り医術修業の為江戸横浜等に留学罷在候末，英語を了解仕候廉を以て旧小浜藩へ慶應三年九月被召抱」云々とあるによれば，自ずから父の修学目的が分かる。当時維新の風雲急にして志ある青年は或いは勤王に或いは佐幕に東奔西走した。斯様の時に臨んで父は医学や化学を以て世に立とうと考えたのである。」（『金蘭簿物語』p. 8）

塚越は，平民であったこともあり，幕末の尊王攘夷熱に巻き込まれることもなく，純粋に自分の好学心の赴くままに生きたようである。その対象が医学であり，塚越が江戸で門を叩いたのが，江戸の蘭方医の大家，伊東玄朴（1801-1871）だった。

伊東は江戸市中で，1833年に蘭学塾象先堂を開いた。大坂の緒方洪庵の適塾，佐倉の佐藤泰然の順天堂等と並び，全国から多くの医師や学生を集めた。しかし，象先堂の門人姓名録に塚越の名前は無い[(6)]。

塚越の江戸での経験で，次に登場するのが，山岡鉄舟と新徴組である。伊東玄朴の塾との前後関係は不明である。

上州出身の一平民である塚越は，昌平坂学問所で学ぶうちに，幕臣と交流を持つようになったのではないか。その中に尊王攘夷の思想の持ち主がいて，清川八郎（昌平坂学問所書生）や山岡との接点ができたことは十分考えられる。

幕府は1862年，尊攘派の不穏な浪士を集めて浪士組を結成することを決定した。この浪士取扱に任命されたのが，尊攘派旗本の山岡鉄舟である。浪士は，武蔵・上野・甲斐・安房・上総・下総・常陸で徴募された。塚越はすでに江戸にいたので，江戸で入隊したと思われる。浪士組は1863年，将軍上洛の警護のため江戸を発し京都に向かう。京都に着くと，幕府から江戸帰府の命令が出て大半は江戸に戻る。一部が京都に残留し後の新撰組となる。江戸に戻った浪士は諸々の問題を起し，山岡は御役御免となる。その後，浪士組は庄内藩に委託され，新徴組として再編成された[(7)]。

山岡の伝手で入隊したのならば，塚越が入隊したのは新徴組の前身の浪士組ということになる。浪士組の待遇は，二人扶持（給与米）と金十両が基本だった。山岡と同行して上京したとすると，1863年までこの仕事をしていたことになる。塚越の人生の流れから行くと，新徴組の後に，伊東玄朴の塾が来るのが妥当であろう。

山岡は剣豪として知られ，後出する塚越の恩人で塚越の碑文を書いた多田元吉も剣の

達人として知られていた。今のところ，塚越の剣の腕前に関する情報は無い。

昌平坂学問所を退学した後，新徴組，伊東玄朴の次に，『金蘭簿物語』に記述が無い，塚越の経歴を発見した。

『金蘭簿物語』の記述は，この後，「医学又は化学を研究するには是非外国語を解せねばならぬ。それで父は英語の研究を始め，目的遂行に最も便利な横浜に出た。」（p. 8）と続くが，塚越は横浜の前に佐倉順天堂で学んでいたことが分かった。

佐倉順天堂の門人帳に「上毛金山麓太田之人　塚越良三」と記載されている[8]。塚越の名前は，新たな門人 12 人の中の一人として記録されている。恐らく慶應元年時のものであるので，塚越は 1865 年に江戸から佐倉に行き，蘭学と医学の手ほどきを受けたことになる。在学期間は不明だが，塚越の医学に対する関心を証明する史料である。そして，ここで蘭学も学んだことが分かる。

順天堂の門人帳には 2 種類あるが，その一つを書き残したのは，塚越関連の重要人物の一人，塚原周造である。門人帳には小浜藩士の井汲新太郎と井坂静太郎の名前も書かれている。井坂は冒頭で触れた，塚越と深い関わりがあった井阪と同一人物で，井汲は，塚原から塚越への惜別の書簡に，「過日井汲氏より君の書簡拝受仕候」（『金蘭簿物語』p. 17）と書かれている。塚越，塚原，小浜藩士井阪，同井汲との交流はこの佐倉順天堂時代に始まっていたと考えていいだろう。

詳細は横浜時代で触れるが，ここで塚原の伝記『塚原夢舟翁』を参照し，塚越と特に関係が深い塚原の佐倉順天堂前後の人生について見ておく[9]。塚越と塚原は共通点が多く，点でつながっている塚越の人生を塚原は線で結んでくれる。

塚原は，茨城県結城郡の現在の千代川村に 1847 年に生まれた。塚原家は士族ではなく地元の水運を活かした富裕な穀物商だった。塚原は，塚越と同じように学問好きが高じて，昌平黌入学を目指して江戸に出奔したが，士族ではなかったため入学を認められなかった。その後父親により呼び戻され，医学なら就学を許可するとのことで，佐倉順天堂に入学し蘭学を学ぶことになった。塚越の入塾と同じ 1865 年だが，塚越よりも入学は早かったようだ[10]。

10 か月ほど学んだ時，師の佐藤尚中が，将軍上洛に随従することになったため，塚原は退学した。その後，江戸に出て，親族の士族の寺田姓を名乗り開成所に入学し，教授心得となった。恐らく 1866 年初めには横浜に移り，横浜在住のタムソン（David Thompson, 1835–1915）に英語を習う。そして，この横浜時代に，塚原，塚越，星の 3 人は一緒に写真に納まっている[11]。

4. 横浜での生活（1865, 1866 年頃-1867 年）── 英語との出会い

『金蘭簿物語』第 3 章「勉学」pp. 8-10，第 4 章「渡米」pp. 19-21

塚越が佐倉順天堂に入学したと考えられるのは 1865 年であるので，横浜に移ったのは 1865 年の暮れか 1866 年の始め頃であろう。

佐倉は，塚越が蘭学・医学の道に入ったという点で重要であるが，後の渡米のことを考えると，英学に入るこの横浜時代はさらに重要である。しかし，『金蘭簿物語』は横浜時代のことは決して多くを語っていない。

横浜時代に関する記述は 2 か所ある。前半は塚越の横浜での生活に関する記述（第 3 章）で，後半は，横浜での星との出会いと小浜藩に雇われた経緯の説明（第 4 章）である。まず前半（第 3 章）の記述を以下に引用する。

> 「医学又は化学を研究するには是非外国語を解せねばならぬ。それで父は英語の研究を初め，目的遂行に尤も便利な横浜に出た。其の年月は明確ではないが，前後の関係より推測して慶應元年頃と見て差支えあるまい。（中略）当時横浜には鐵の橋（現今の吉田橋）に関門を設け，其処に警備隊が駐屯していた。其の隊長は多田元吉と言ったが，父は山岡鉄舟の紹介で此の人に頼り，兵員に加えて貰った。そして勤務の余暇，外人に就いて，英語を学ぶ事にしたのである。斯くて父は刻苦を積み，英学上相当の進歩を得た。折しも若狭小浜藩（現当主伯爵酒井忠克氏）に於いて時勢の進運に顧み英語教授を為すべき人物を聘する為め藩臣池田正吉を横浜に遣したのに会い，父は此の人の推挙で小浜藩士となり，不取敢東京藩邸（牛込矢来）で英語訓導に従事する事に成った。時に慶應 3 年 9 月，齢 26 歳であった。」（『金蘭簿物語』pp. 8-9）

塚越が横浜に来たのが 1865 年か 1866 年初頭で，小浜藩に英学教師として雇われたのが 1867 年であるので，2 年弱の英学修業で，英語教師が務まる程度に上達したということになる。まず，塚越が横浜で最初に世話になった多田元吉についてまとめておく。多田は冒頭で取り上げた恩人の一人である。

(1) 多田元吉（1829-1896）

塚越は，横浜でも山岡の世話になっている。山岡から吉田橋の警備隊長，多田元吉を紹介され，職を提供される。多田は塚越の墓碑銘の選文者である。「父に対して深き理解と同情とを有し，平素，父の学識，能力を充分認めて種々相談にも興り，父が剛直で

苟も世と移らざるが如き性格を愛し敬重した」(『金蘭簿物語』pp. 76-78) と書かれている。世渡り上手では無さそうな塚越の生涯に渡る良き理解者であった。

多田もまた上総富津の平民の出で，若い時に江戸に上り千葉周作道場で腕を上げ，幕臣に取り立てられた[12]。平民出身で関東近県から江戸に出てきた点は塚越，塚原と共通している。多田は塚越より 13 歳年上である。

多田の江戸での生活についてはほとんど分かっていないが，1860 年には横浜にいて，神奈川奉行所で警備の下番として勤務していた。役職は下番世話役助で四石二斗，二人扶持だった。居留地の外国領事の宿所，商館等の警備に当たっていた。塚越が横浜に出てきた1865 年か 1866 年には，多田は定番役以上の役に就いていた。

塚越の職業に関しては，『星亨とその時代 1』に塚原周造の談話 (p. 52) が掲載されている。そこでは，吉田橋の関門ではなく，横浜運上所下番と書かれている。吉田橋の関門も横浜運上所も，警備は神奈川奉行所の管轄だった。警備隊の勤め先は固定していたわけではなく，多田と同じように，塚越も，運上所や関門，商館や外国人居留地の警備もしていたのだろう[13]。

塚越は平民出身でありながらも，半幕臣のような職場，人間関係の環境で働いていた。警備職という仕事柄，外国人から危険な浪人と誤解されることもなく，横浜在住の外国人にも接しやすかったと思われる。

(2) 横浜での英学修業 ── 横浜英学生コミュニティ

多田の口利きで，警備の仕事を得た塚越は，非番の時間に，外国人に英語を習ったという。この横浜での英学修業に関して，その背景的情報を提供してくれるのが，塚原周造である。

『金蘭簿物語』によれば，1865 年頃，塚越が江戸から横浜に出てきた理由は医学や化学のための英学修学である。佐倉順天堂で学んだのは，蘭学と医学だったが，ここから英学修業に進む経緯はどうなっていたのだろうか。

1859 年に開港した横浜には神奈川居留地や外国から，宣教師，商人，兵士などの外国人が続々と集まり，1865 年には外国人居留地は急速に発展しつつあった。居留地在住の外国人や通訳から英語を学ぶために，英学修業希望の日本人も横浜に集まってきていた。

佐倉順天堂を出て蘭学・医学から英学修業に変わった例としては，すでに何度も登場している塚原周造が挙げられる。ともに順天堂で学んでいた塚原の影響で塚越も英学に転向した可能性がある。

慶應元年に順天堂の師，佐藤尚中が江戸に上ることになったので，塚原も江戸に出て，親戚の幕臣寺田氏を名乗り，開成所に入学し英学を学んだ。刻苦勉励の甲斐あり，世話

心得から助教授に任ぜられた。この頃の塚原の関心は医学を離れ航海術にあり，幕府の海軍操練所に入学を希望していたが，幕府瓦解の兆しもあり諦めざるを得なかった。

開成所もほぼ閉鎖状態になり，塚原は航海術修業のため横浜に赴き，横浜運上所の渡辺清次郎と知り合った[14]。渡辺は塚原の航海術志望を聞き，「太平洋汽船会社のアルウイン」に取り次ぎ，塚原とアルウインは互いに日本語と英語を教え合うことになったと『塚原夢舟翁』に書かれている[15]。

その後まもなく，アルウインの世話で，米国人宣教師バラ（James Hamilton Ballagh, 1832–1920）にも日本語を教えることになり，塚原はその傍ら，タムソンに英語を学んだ。『塚原夢舟翁』には塚原とタムソンが二人で撮った写真が掲載されている。バラとタムソンはともに横浜英学所で日本人に英語や数学を教えており，塚原はその最上級クラスにいたという[16]。

前稿でも触れたが，ここでまた，横浜英学所で誰が，いつ，どこのクラスで学んでいたか，という問題が出てくる。これに関しては，タムソン等横浜で英語を教えていた米国人宣教師に詳しい，中島耕二氏が次のように状況をまとめている。

「横浜では星亨，益田克徳，鈴木貫一（バラから受洗），塚原周造らは皆バラやタムソンのところに出入りし英語を学びました。彼らは横浜英学所，ヘボン塾，タムソン塾など掛け持ちで出入りしていました。ヘボン先生やブラウン先生は敷居が高いため，バラやタムソンなど年齢の近い先生に就いたのですが，バラは若干アカデミック面で難があり，畢竟彼らはタムソンのもとに集まってきました。」（中島耕二氏による）

横浜英学所を現代の学校と同じような，独自の校舎と教室があり，生徒管理などもきっちり行われていた学校と考えること自体が，事実の把握の障害になっているかもしれない。ヘボン（James Curtis Hepburn, 1815–1911），バラ，タムソン，ブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810–1880）には，個人的に指導を受けていた日本人もおり，授業料無料ということもあって，横浜英学所の正式な学生と個人指導の学生との垣根は低かったのではないだろうか。英学教授を求めて門を叩いた者は，誰でも学べるような環境だったと思われる。鳥羽藩医の息子，安藤太郎（1846–1924）の 1863 年の談話には次のように書かれている[17]。

「英学の先生は暁の星ほどもない。こっちは習いたいが，一途で方々を探すと，横浜に米国人が 4 人いて親切に教えてくれるとの話，行暮れた旅人が燈火を見付けたかのよう，さっそく出掛けた。（中略）そこでいまの税関や県庁のあるあたりには，

運上所と称えたもので，そこへ米国人を尋ねると，見る影もなき長屋に4人が棲んでいて，破れ畳の上で教えている。もともと耶蘇教伝道の目的で渡来したもので，それには語学の教授をもって青年を手馴づけるのが早道であると，門を訪ずるものは喜んでこれを迎え，無月謝同様の厚遇をした。その先生がヘボン君・バラ君・タムソン君・ブラウン君でヘボン君はいまに壮健でいられる。（中略）当時わたくしどもの仲間には大鳥圭介・星亨・沼間守一・益田孝・林薫・三宅秀それに先年鎌倉で溺死した田中館理学博士ら，いわゆる後年の名士がいた。」

この安藤太郎が，順天堂の名簿の「志州鳥羽藩　安藤尭氏」と同一人物だとすると，年代的には問題があるが，塚原，塚越と同じように順天堂の蘭学・医学から英学修業を目指して横浜に来た，ということになる。土佐の調査によると，佐倉順天堂の門人の中には，順天堂から横浜に移った例が次のように挙げられている。

① 高埜周道（下総猿島郡出身） 慶應元年から明治3年まで順天堂に学び，その後，横浜でヘボンに学ぶ。明治4年，帰郷して開業。（p. 257）
② 村治謙造（江州膳所藩） 文久3年から順天堂に学び，後に横浜でアメリカ人宣教師ブラウン，タムソンに英語を学んだ。（p. 258）

このように横浜に集まってきた英学志望者に関しては，塚原がさらに貴重な情報を提供している。アルウインとの日本語・英語交換授業の後，次のように伝記の記述は続く。

「居留地百一番の英国牧師ベレー氏が，万国新聞というのを発刊するから翻訳を頼みたいと君（筆者注，塚原）に申し込んで来た。それ以来君は一週間五円の報酬を受け，自修の傍ら万国新聞に執筆することになった。（中略）その内に越後からは小林雄七郎氏が来る。江戸からは星亨氏等が君を頼ってやって来るという有様で，余り広くもない君の借間は頗る狭隘を告げたから，どうしても引っ越さなければならなくなった。そこで北方村の東漸寺の本堂を借り受け，三人で自炊生活を営むことになった。そうして君は小林氏をバラ―に周旋し，また星氏を百一番に入れたりして生活費の補充を計り，君は引き続きアルウイン氏と日英語の交換稽古をしていた。」（『塚原夢舟翁』pp. 9–10）

「万国新聞」は，英国領事館付の宣教師のベイリー（Michael Buckworth Bailey, 1827–1899）が1867年1月中旬に横浜で発行した新聞である。当初は大槻文彦が翻訳を行っていたが，6, 7号で辞めて，後を塚原周造に譲った。大槻は辞書『言海』で知られ

るが，バラやタムソンに就いて英学を習っている。大槻もまた，横浜に英学を学びに来ていた英学志望者だったが，塚原との交流の有無，程度は不明である[18]。

ここには，塚原と小林，星の3人の共同生活と書いてあるが，塚原のもとに，諸藩の英学生が次第に集まり，東漸寺の本堂や客殿も一杯になった。小林雄七郎（1846-1891）は米百俵で知られる小林虎三郎の弟で，戊辰戦争敗北後，江戸に出て1870年慶應義塾に入学し，その後，大蔵省紙幣寮の官吏となった。塚原と小林，星以外にも，塚原のもとに集まってきた英学生としては「会津の野口，彦根の鈴木，大阪の大井憲太郎，雲州の飯塚修平，加州の林賢徳，姫路の長谷川規二郎，羽州酒井の大井等の諸氏で，何れも各藩から選ばれた有為の青年だった。」（『塚原夢舟翁』p. 11）という。この中には，欧米に留学した者も少なくない[19]。

こうして東漸寺に，塚原を中心とした，全国から集った英学生のコミュニティが成立していたことが分かる。彼らは，各自，タムソンやバラ，ヘボン等に，横浜英学所で，あるいは個人的に英語の指導を受けていた。塚原関連史料に塚越の名前は出てこないが，塚越も，佐倉順天堂から横浜に移り，塚原等と英語を外国人宣教師等から学んでいたことは容易に想像される。

星亨の研究者である有泉貞夫も，塚原を中心とした，この横浜英学生コミュニティが存在し，塚越もその一員だったと示唆している。

> 「塚原の他洋書を齧った二，三の失業青年と星は，市内の寺で共同生活をはじめた。このころ星は，塚原の紹介で，宣教師が発行していた新聞の翻訳などで生活費を得ていたが，このグループに，横浜運上所の下番をするうちに英語を習い覚え，若狭小浜藩に召し抱えられた上州出身の塚越良之助（酸素彦）がいた。」（『星亨』p. 14）

このように，幕末の1864年頃から，横浜には英学修業目的に，続々と青年が集まっていたが，その中には，順天堂で蘭学・医学を学んでいた者も少なくなかった。1865年，順天堂の師，佐藤尚中が江戸に呼びだされると，塚原のように，佐倉を去って，江戸や横浜に英学を学びに出た塾生も少なからずいたと思われる。

塚越は平民出身ではあるが，山岡鉄舟の知遇があり，横浜運上所雇いの警備員として，半ば士族的な立場にあり，塚原や安藤とともに，米国人宣教師に英語の指導を受けることに支障は無かったと思われる。

(3) 星亨との関係 ── 星関連史料と『金蘭簿物語』のクロスチェック

塚越の横浜時代は，塚原を中心とする英学生コミュニティとの交流が重要だった。この中に星亨もいて，『金蘭簿物語』の第4章では，星と塚越との関係について次のよう

に記している。

「余の父は前述の如く，横浜に来て，鐵の橋関門の隊中に勤務する傍ら，英語研究に従事し，太田町の長家で自炊生活をして居た。丁度其の長家の一軒置いて隣に居を定めたのが星一家で其の為偶然父は星と相知るに至った。（中略）学問にかけては，父の方が先輩格であった事は勿論で，後年に至っても，星の母は余の父に対して常に先生々々と言って尊敬したと言うに徴しても単なる友達関係では無かったのである。当時父は星に英語を教え，星はそれによって相当得るところがあったと聞いている。而して父が酒井侯に召し抱えらるるに及び，星を助手として伴い，牛込矢来の藩邸に両人同居して自炊生活を続けた。一人が豆腐屋に走れば，一人が八百屋に行くと言う様な具合で極めて親密に日を送ったのである。」（『金蘭簿物語』pp. 20-21）[20]

これによると，年長である塚越が，星の英語の指導をし，塚越が小浜藩に雇われると，星も助手として雇ってもらったと書かれている。両者の関係を星亨関連史料によって以下に検証する。

星の横浜時代の英学修業の様子を語る一次史料は限られている[21]。星自身の自伝，日記の類は無く，星研究には欠かせない『星亨とその時代 1』に引用された，星が関わった人々の回想が主な史料となっている。本書に回顧談が引用された人物名，星との関係，史料筆記の年代，回想の主な内容は以下の通りである。

「渡辺顕哉君談話」　本人検閲，明治 38 年　中野寅次郎筆記（pp. 29-32）

横浜に転居した星一家が，横浜在住の蘭医，渡辺貞庵に星を預けた。顕哉は貞庵の養子である。星は顕哉から四書五経の素読，『解体新書』，『医範提綱』等の指導を受けた。

「渡辺牧太君談話」　本人検閲，明治 42 年 5 月　野沢鶏一筆記（pp. 32-34）

牧太は渡辺貞庵の息子。星は上記のように貞庵に弟子入りしていた。牧太は，横浜英学所に通い，修学した内容を星に伝授した。やがて星自身も，奉行附医員の門人として就学を許された。横浜時代の記述が詳しい。

「男爵前島密君の先生談」明治 42 年 6 月　同君寄稿（pp. 36-41）

星が幕臣小泉家の養子となり，横浜から江戸の牛込矢来町に引っ越した後，英学，漢学の指導を前島から受けた。

「何礼之君談話」　本人検閲，明治 42 年 5 月　野沢鶏一筆記（pp. 41-42，pp. 56-58）

前島が神戸開港事務のため兵庫転勤となり，その後，星の英学指導を何が継いだ。

何によると当時，星は開成所に通い，英語世話役心得という役についていた。何は海軍伝習所の教官になり，星も何の推挙により海軍伝習所生徒英語世話役となった。星が小浜から大阪に移った後の記述も詳しい。

「塚原周造君談話」　明治 38 年　中野寅次郎筆記（pp. 51–53）

塚原と星は，慶應元年か 2 年に開成所で知り合った。星の小浜藩雇用の経緯が語られている。塚越酸素彦も登場する。「塚原君提出の三人の写真」（p. 51 左上隅）とあるが，写真は掲載されていない。この写真は塚原の記述によると，星の小浜藩就職が決まった時に撮影されたもので，『塚原夢州翁』に掲載されている，星，塚原，塚越が写っているものではないだろうか。

「池田正吉君談話」　本人検閲，明治 38 年　中野寅次郎筆記（pp. 53–56）

池田は『金蘭簿物語』によれば，塚越の小浜藩就職に関わった人物である。星と池田はかなり密接な関係にあったようで，星に関する私的情報，小浜時代と小浜脱出時の星の動向が詳しく語られている。

「松田周次君談話」　本人検閲，明治 38 年　中野寅次郎筆記（pp. 58–62）

松田は何の塾で星とともに学んでいた。星が小浜から大阪に移った後の記述が詳しい。

このように多くの史料が，星の横浜，小浜，大阪在住の英学修業時代を網羅している。問題は，談話の聴き取りが行われた時期が，幕末維新期から 40 年近く経過している点である。記憶も不正確で，個々の談話の内容に矛盾する点が見受けられる。史料間のクロスチェックが必要である。本稿では必要な部分に関して，可能な部分のみ史料照合を試みる。

まず，星の横浜時代における塚越との関係に関する記述を採り上げる。

先述した，タムソンに詳しい中島耕二氏から渡辺牧太が横浜英学所に入学したのは 1864 年ではないかとの指摘を受けた。星の入学もそれ以降ということになり，星が横浜英学所で学んだ期間は 2 年程度ということになる。塚越は，その約 1 年後に横浜に来たので，横浜生活と英学修業は年下の星の方が先輩ということになる。

この横浜時代の星の英語力に関しては，二つの情報がある。一つは星が，横浜英学所の最下級クラスの学生であったことである[22]。もう一つは，前島の談話の以下の部分である。

「亨君は余が家に初めて来たりたる時は未だ英の文法をも知らざる初学生なりしが，その理解力は非常なものなりし。余の許に在りしうちに君の修し得たる英書は英吉利文典，クェケンボス，万有究理，ハイスクール・ゼオグラヒー等にして，その頃

にはなかなか学力高等の程度なり。」(『星亨とその時代 1』p. 37)

前島の記憶が正しければ，前島に指導を受ける前，つまり星の横浜英学所時代の英語力は初心者レベルだったということになり，最下級クラスという情報とも一致する。

『金蘭簿物語』でも，塚越が星に英語を指導したとある。星は 1865 年で満 15 歳，塚越は 8 歳年上である。星が英学所の最下級クラスで英語を学んだ 1 年程後に，蘭学を学んだ塚越がやってきた。星の英学のモティベーション次第だが，『金蘭簿物語』に書かれているように，蘭学から英学に移り，しかもモティベーションが高かった塚越の方が，英語力では星の上だったことは考えられる。

星関連史料で興味深い点は，塚越を小浜藩が雇った時に名前が出てくる池田正吉の談話が掲載されていることである。残念ながら，塚越雇用の件は書かれていないが，塚越は星の雇用の際に登場する。

「しこうしてここに下総の人塚越鈴彦と云うものあり。当時小浜藩に抱えられ少禄を食み居りしが，当時の藩邸は牛込矢来町に在りて塚越もまた藩邸の近傍に住居し居り，一日来たりて曰く，貴藩は有為の青年を抱えんとのご計画なるが，ここに一人あり，この人物は果して物の役に立つや否やは知れざれども，兎に角気象は面白き男なり，いかんと。予はすなわち塚越の紹介により初めてその青年と会見したり。これすなわち星亨君なり。」(『星亨とその時代 1』p. 53)

塚越は上州出身で，池田は，下総出身の塚原と混同している可能性がある。『金蘭簿物語』における，「塚越＝星の小浜藩雇用の恩人説」を裏付ける記述である。松田周次の談話でも，「同年五月頃に至り若州小浜藩の塚越酸素彦と云える人，藩に英学校を建てるが為に君を教師として，招聘せんと請い来たり，君は之を承諾して同藩に赴くこととなれり」(『星亨とその時代』p. 59) と，星の雇用に関する塚越の直接的関与について述べている。

しかし，小浜藩による星雇用に関しては，『星亨とその時代 1 』所収の談話には複数の異説も見られる。以下に簡潔にまとめておく。

前 島 密 談 話：前島の門生の小浜藩士日比野勉の周旋で小浜藩が雇用。(p. 40)

塚原周造談話：塚原の開成所での知り合いの小浜藩士井汲新太郎が，塚原に小浜藩雇いの洋学の師を求めて相談，塚原が星を紹介して小浜藩が雇用。(p. 52)

何 礼 之 談 話：星に就いて英学を学んでいた小浜藩士日比野勉から，小浜藩英学教師

募集の話を薦められ，何の同意もあり小浜藩が雇用。（p. 56）

いずれも小浜藩士である日比野と井汲が関係している。井汲はすでに触れたように，佐倉順天堂の塾生で，開成所でも塚原と同僚だった。日比野は小浜藩士が戊辰戦争時に結成した浩気隊の一員である。小浜市役所が保存している「明治維新当時に於ける諸役乃分限帳」には，学校出勤として，英学・三十五石・井波収，英学・四十石・紅林糾，英学・三十五石・日比野勉，と3人の名前が記されている[23]。

諸説をまとめると，星の雇用に関わった，小浜藩士の日比野，井汲は，塚越あるいは塚原と，佐倉順天堂や開成所，前島の私塾等で，蘭学，英学を介したつながりがあり，彼らもまた，横浜の英学生コミュニティの一員か，その周縁的存在だったのではないだろうか。小浜藩からの，塚越に次ぐ英学教師の招聘は，池田，日比野，井汲，塚原，塚越等の様々なルートで同時進行的に進められていたのだろう。

星雇用の決定打が，『金蘭簿物語』に書かれているように塚越だったと，史料的に確定することは現状では難しい。むしろ，星の小浜藩雇用は，横浜英学生コミュニティと小浜藩士英学生等との交流の中から生まれたと考えるのが妥当ではないだろうか[24]。塚越もまた，同じような経緯で雇用された可能性が高い。

⑷　横浜医学就学例

塚越の横浜での目的は，英学・医学・化学の修学にあった。外国人と医学という点に注目した場合，どのような可能性があったかを，見ておきたい。

①　ヘボン塾

ヘボンは横浜英学所で日本人を教え，妻のクララ（Clara Mary Hepburn, 1818–1906）は1863年11月に，男女共学の私塾を自宅に開校し，これはヘボン塾と呼ばれている。増田孝（幕臣），林薫（幕臣），高橋是清（仙台藩），三宅秀（江戸の医師）等が学んでいた。クララは横浜英学所でも一時期授業を持っていた。

塚越の医学志向を考慮すれば，彼の英学の師として理想的だったのは宣教医ヘボンだっただろう。ヘボンは，日本人の医学生の指導もしていたようで，1867年10月の時点で，医学生を8人教えていた[25]。彼らは薬の調合や小さな手術の助手を務めていたという。今のところ，塚越の名前はヘボン関連史料には見られない。

②　アレクサンダー・ヴェダー（Alexander Madison Vedder, 1831–1870）

ヴェダーは，米国海軍医師として来日し，1865年6月に居留地で開業した。1868年正月に長州藩に雇われるまで横浜に住んでいた。横浜英学所，ヘボン塾で学んでいた三宅秀が，ヴェダーについて2年間，英語と医学を修業した。塚越の横浜時代と期間は重なるが，ヴェダーの病院に塚越が関わっていたことを示す史料は無い[26]。

③　ドクトル・マイル（オランダ人）

ドクトル・マイルは『星亨とその時代 1』に掲載されている，渡辺顕哉の談話（『星亨とその時代 1』p. 31）に登場する。元町の山の手に病院を開業していた。ドクトル・マイルの病院を渡辺と星が訪問したところ，書生が集まって死んだ飼い犬の解剖を行っていた。当時は蘭方医やその弟子が多かったので，横浜で医学をオランダ人に学ぶのは自然な成り行きだっただろう。塚越は順天堂で蘭学を学んだと思われるので，オランダ人医師に師事した可能性もある[27]。

④　ジョナサン・ゴーブル（Jonathan Goble, 1827–1896）の私塾

ゴーブルは医師ではなく宣教師だが，以下のような可能性もあるかと思い，採り上げた。塚越が 1870 年に渡米する際，自分の身分を「米人商人ゴブル小仕」，「米人ゴブル小仕」と書いている[28]。

塚越は渡米時には，すでに小浜藩雇の英学教師だったが，何らかの理由で身分を偽る必要があり，かつて横浜時代に世話になった外国人の名前を勤め先に使ったとも考えられる。ゴブルから連想される当時の横浜在住外国人は，ジョナサン・ゴーブルである。彼はアメリカバプテスト自由伝道協会（ABFM）から派遣された宣教師で商人ではなかったが，1862 年から横浜開港地百六番で英語塾を開いていた。塚越が横浜入りした 1865 年には百五十番に移り 1867 年まで横浜にいた。塚越がゴーブルの家塾でジョナサンと妻のエリザに英語を学び親しく交際していた可能性はあるが，これも裏付ける史料が無い。

以上，横浜で塚越が，横浜在住の外国人医師について英学及び医学修業をした場合の可能性を探ってみた。現状では塚越とここで採り上げた外国人との関係を示す史料は無く，横浜の医学史の研究に踏み込み，関連史料を渉猟する必要がある。

5. 江戸牛込矢来，小浜（1867 年–1870 年）── 小浜藩英学教師時代

『金蘭簿物語』第 3 章「勉学」pp. 9–10，第 4 章「渡米」pp. 10–22

1867 年 10 月，塚越は横浜で小浜藩に英学教師として雇用され，正式に士族となり，横浜から江戸に移り，牛込矢来の小浜藩邸で英語の指導に当たることになった。ここでの滞在は約 1 年で，1868 年年 9 月に小浜に移った。『金蘭簿物語』における小浜藩時代の記述は以下の通りである。

> 「父は東京酒井侯の藩邸にある事約 1 カ年，それから国表若狭国小浜に転住した。然るに上掲，星の書状に依れば，父渡米の際，星は既に若狭を去って大阪に来たり，紀州侯に召抱えられて居たらしい。」（『金蘭簿物語』p. 21）

有泉によると，星の小浜藩雇用は 1868 年 3 月であるので，塚越と星は，半年ほど，牛込矢来の小浜藩邸で藩士に英語を指導していたことになる。

『金蘭簿物語』には，いくつかの一次史料が引用されており，ここでも重要な史料が掲載されている。塚越が 1870 年 4 月 6 日（旧暦 3 月 6 日）に書いた，小浜藩侯宛の渡米許可の願書の文面である。そこには，小浜藩雇用以降のことが以下のように書かれている。

「御召抱相成候義は東京御邸中に於て，英学有志の向へ其初歩之訓導仕候て小生は諸先生へ質問研究仕り，一科学成功仕度志願に御座候。（中略）然る處，爾来御都合に依て当地へ轉住仕り，洋蠻に於て授讀罷在候處，追々出席の生徒も滅却仕り，今日に至り候てはさしたる公務も無御座候に付何卒宿願の化学修業仕度奉存候。」（『金蘭簿物語』p. 11）

塚越は，江戸の小浜藩邸で英学志望者に初歩を教えていたが，江戸で様々な学者と交流しているうちに，化学の研究への思いが高まった。その後，藩の都合で小浜に移り英学を指導していたが，生徒が徐々に減ってしまい，やるべきことが無くなってしまったため，宿願の化学を勉強したいので，米国渡航を許可してほしい，と書いている。

この小浜における英学のモティベーションの低さに関しては，池田正吉の談話がほぼ同じ状況を示している。

「この頃洋学は全国なお蘭書盛んにして英書は未だ広く行われず。小浜藩のごときもまたこの傾向にして，英語を学ばしむることは頗る難事なりしが，予は種々丹精してついに予の宅に英学校を設くるまでに至りたり。そもそも予の宅はもと藩中有名なる松林寺と称する祈願所の跡にして，これを藩主より特に予に賜わりしは時機を見て学校にでも起せとの御趣旨と了解し，かくは英学校を設立したるものなりしが，来たりて英語を修業せんとする者は寂々として極めて寡く，これには予も閉口したり。これ畢竟するに一方には前記のごとく蘭学を好む傾向未だ全く去らざると，他の一方には当時吾藩においてはひたすら兵式の改革に熱中し，東京より英式練兵の教師まで聘し来たり大に奨励したるを以て，兵馬空惚の際とて文学として英学を研究する星君の門よりも，むしろ兵式を教うる者の門に多く学生は集合したり。」（『星亨とその時代 1』，p. 54）

小浜は歴史的に蘭学・医学が盛んで明治になっても英学熱は低かったと書かれている。小浜で英語を勉強したい生徒が少ないという点は塚越の記述と一致している。その理由

としては，依然として高い蘭学熱もあるが，英語の勉強よりも，英式練兵の方に小浜藩士が熱中したと書かれている。小浜藩の英式練兵については，前稿で触れたが，1869年に小浜藩に導入された[29]。文法やリーダーで英語を学んでも，将来，何の役に立つか明確でなかったのだろう。星ひいては塚越はその現状を憂い，『金蘭簿物語』によれば，星は大阪に，塚越は米国へと活動の場を移すことになる。

しかし，この点について，星関連史料の情報は『金蘭簿物語』とは異なる。何礼之の談話には次のように書かれている。かつて星を指導した何は大阪で大阪府立洋学校に勤務する傍ら，私塾も主催していた。1869年の秋，星から小浜生活の不満と大阪移住の希望を聞き，何は歓迎の意の返事を送ったところ，次のような事態となった。

「幾程もなく氏はその配下の士，丁野大八，塚越酸素彦，外一人と共に窃かに小浜藩を脱して予の許に来たり投ぜり。氏はここより洋学校の手当を受け，ここにて自己及び同行の書生三人を養い居たり。」（『星亨とその時代 1』p. 57）

つまり，星は塚越等を伴って小浜を脱出し，塚越は大阪で星に書生扱いで養われていた，という。何の談話は，複数の点において，『金蘭簿物語』の記述と矛盾する。まず，塚越と星の上下関係であるが，ここでは塚越が星の「配下の士」となっていて，上下関係が逆転している。そして，塚越もまた星とともに，小浜を脱出したことになっている。塚越も星同様に，小浜の英学の低迷状況に不満を感じていたが，塚越が一度小浜を脱出した後に，再び小浜に戻り，藩主に留学初期費用の援助も含めて渡米許可を願い出たとは考えにくい。

そもそも塚越が星に付いて大阪に行ったとして，その目的は何だったのだろうか。塚越は小浜で職を失ったわけではない。大阪に塚越の化学，医学への向学心を満たすものがあったとは思えない。星は父母を養うために日々の仕事の口を確保する必要があったが，塚越にはその心配も無く，自分の向学心を満たしてくれる場所がありさえすればよかった。それは日本国内ではあり得なかった。

しかし，星の脱出は，小浜藩の一部の関係者以外には，知らされずに実施されていたことが，以下の池田正吉の談話から分かる。塚越の大阪同行も完全には否定できない。

「かくのごとくなるを以て君は小浜の地を到底なすに足らざるものと看做しけん，断然意を決し，まず大阪に出でんとて書を予と並びに能く君の人となりを解したる藩の大参事某氏とに遺し置き，飄然小浜を脱走せり。その遺書の予に与えたる分にはまず永々の厚意を謝し，（中略）予は君の意衷を諒としことさらに君の脱走を秘し置き，なお暫くの間は藩庁をして両親の許に扶持米を給与するに至らしめたり。」

（『星亨とその時代 1』（p. 55）

池田の取り成しで，星の脱藩は一部の関係者以外には秘され，給料は依然として星の家族に払われたという。塚越が同じ状況だったかどうかは書かれていない。

『金蘭簿物語』には，星が塚越宛に 1870 年 4 月 1 日に書いた送別の書簡の文面が引用されている（『金蘭簿物語 1』pp. 19–20）。その内容には，塚越が大阪に同行したかしなかったかを示唆する記述は無い。なお，この手紙には，塚越がフランス語も勉強している旨が書かれている。

有泉は，「星の大阪行きには，小浜下向以来ずっと一緒だった塚越良之助ほか二人の書生が同行した。」（有泉『星亨』p. 16）とし，『星亨とその時代 1 』には，「丁野大八，塚越鈴彦等都合三人の部下を卒い直ちに小浜を脱し大坂に赴く。時に明治二年の初秋なり。（中略）かかる所に先生は丁野等三人を卒いて何君の許に来投したるなり。」（『星亨とその時代 1 』pp. 45–46）としている。

有泉の記述の方はそれほどでも無いが，穿った見方をすれば，星研究は，やはり星亨という親分肌の政治家のイメージに引きずられ，史料の解釈もその影響を受けることがあるのではないだろうか。星研究においては，塚越が星に同行したかどうか，塚越と星との上下関係は，歴史的に重要なことではない。『金蘭簿物語』は史料として扱うには主観的過ぎる傾向はあるが，そこに引用された一次史料の内容は重要である。『金蘭簿物語』に引用された，塚越の留学願書と星の塚越宛の書簡の内容は，史料として主観や偏見を排して，慎重に分析されるべきではないだろうか。

6　渡米と渡米に至る経緯（1870 年 3 月–6 月）

『金蘭簿物語』第 4 章「渡米」pp. 10–22

塚越の渡米に関して，『金蘭簿物語』は，かなりの紙数を割いている（pp. 11–22）が，その内容は，知人からの惜別の歌や書簡の引用となっている。送り主は以下の通りである。

浦井義路（蟹灣学士）：出身地不明
金上方渓（仙台人）
船山宣謹（新発田人）
越智垣（会津人）
菅中太郎（柳圃）
鶴嶋某（鵜羽島）

いずれも詳細は不明であるが，出身地からすると佐幕系の人脈が多いように見える。佐倉順天堂の門人帳にはこれらの名前が見当たらないので，横浜英学生コミュニティの関係者だろうか。

塚越の米国留学の理由は，『金蘭簿物語』に全文引用された，前出の 1870 年 4 月 6 日（旧暦 3 月 6 日）の藩主宛ての願書に書かれている。塚越は化学研究に目覚め，その研究を極めるには西洋に行くしかないと考えた。化学について書かれた英書を読む必要があり，実際に実験等も行う必要がある。また，現地の人々と日本人との交流も盛んでそれは有意義なことである。米国は，土地が広大で国民の気質も温厚である。知人も多くいるので多少の出費の援助をお願いできれば，渡米後のことはどうにかなる，と書いている。

星の大阪行きは，かつての師の何礼之が頼りであるが，大阪とは比べ物にならないくらい，物理的にも精神的にも遠い米国に，塚越は誰を頼って行くつもりだったのだろうか。米国に知人が多くいるということだが，果たして誰の事を言っているのだろうか。

かつての横浜英学コミュニティのメンバーですでに米国に渡っているのは，彦根藩士の鈴木貫一だが，鈴木は妻の健康を案じて，1869 年には SF から帰国している。塚越と同じ，横浜の太田町に住み，1867 年に渡米した仙台藩士の高橋是清と鈴木知雄も 1868 年に SF から帰国している。

1870 年 6 月に，塚越と同船した日本人留学生は，旧幕臣が 3 人，佐幕の桑名藩出身の 2 人がいた。いずれも潤沢な費用があるわけでもなく，ニューヨークのフェリスのように米国の学校を紹介してくれる当てがある訳でもない。いずれも，有り金はたいて片道切符を買ったような乗船客である。この船にどうして，このような 6 人が乗り合わせたのかも，不思議である。6 人はすでに横浜で知り合っていたのだろうか。他の 5 人はまだしも，塚越が「ゴブル小仕」と身分を偽って出国するのも不可解である。

塚越の渡米に関しては不明なことが多いが，ここまでの彼の人生を通して感じられるのは，塚越の人並外れた行動力である。江戸，横浜，江戸牛込矢来，小浜，SF と，十分な資金と見通しもなく世界を広げていく。思い切った決断と実行を繰り返してきていることが分かる。その原動力として『金蘭簿物語』では，化学，医学といった向学心が強調されている。

おわりに

本稿では，塚越の出生（太田）から，江戸，横浜，江戸牛込矢来，小浜，渡米に至るまで，それぞれの時代に区切り，『金蘭簿物語』の記述を，諸史料を使って検証する形で論述を進めた。

その結果，明らかになった点を改めて以下にまとめておく。

1. 塚越は江戸に出て，平民の身分であるにも関わらず，昌平黌で学ぶことができ，山岡鉄舟と知り合い，新徴組に参加した。それぞれの経緯に関しては，検証する史料が無いが，事実無根ということも無いと思われるので，塚越の物おじせぬ行動力の賜物と理解したい。『金蘭簿物語』（p. 69）には，塚越の性格が，社交的でユーモアに富んだ発言をする人物として書かれている。この性格が幸いし，行く先々で人脈を開拓できたのかもしれない。
2. 塚越が，地方の平民の生まれにも関わらず，江戸で伊東玄朴に師事し，佐倉の順天堂に入塾し，蘭学・医学を学んだ点は，塚越の向学心の現れと言えよう。塚越の化学，医学への関心の高さは『金蘭簿物語』で，随所で強調されていて，その点は，順天堂入塾で証明された。
3. 佐倉順天堂で，塚越と同じ平民出身の塚原周造，小浜藩士井阪静太郎，井汲新太郎に出会う。彼等との交流が，後の横浜英学修業，小浜藩による英学教師としての雇用につながっていく。この背景には，塚原を中心とする横浜の英学生コミュニティがあったと考えられる。彼等は順天堂の蘭学・医学から志望を英学に変え，横浜在住の外国人から直接英語を学ぼうという学生の集まりで，全国から集まってきた。その中に塚越も位置づけることができると思われる。
4. 横浜で塚越と師弟関係になった星亨の関連史料は，潤沢ではないが，『金蘭簿物語』の背景を理解するのに貴重な情報を提供している。しかし，その史料が，幕末から 3, 40 年も経過した後に収録された関係者の談話なので，正確さを欠き，相互間の矛盾も散見される。これらの史料を活用した従来の星研究には，若干の不正確さと星顕彰的傾向が感じられ，『金蘭簿物語』に引用されている一次史料の，星研究への積極的活用を提案したい。
5. 塚越の渡米に関しては，『金蘭簿物語』の記述を裏付ける史料は発見できなかったが，前出の横浜英学生コミュニティの中に，塚越以前に欧米に留学した者がいる。星から塚越へ送別の書簡の中にも，欧米留学への憧れが感じられるし，塚原も勝海舟の息子小鹿が 1867 年に高橋是清等と米国留学した際には，アルウインに留学の便宜を図ってもらおうとしていた[30]。塚越もこのような環境の影響を受けていただろう。

横浜時代に芽生えた留学志望が，小浜藩での英学不振をきっかけに，化学修業のための留学実行へとつながったのではないだろうか。初期費用だけ藩主に捻出してもらい，渡米後のことは現地の知人の世話になるという大胆な計画である。この「在米の知人」が誰だったのかという点も興味深い。いずれにせよ，ここでも，塚越の向学心に焚きつけられたバイタリティが感じられる。

6.　今後の課題であるが，まず，慶應年間前後の，横浜の英学状況を精査し，塚原を中心とした英学生コミュニティの存在と実態を明らかにし，歴史的に位置づける必要がある。その際に，前稿で扱った，酒井家文庫の英書への星，塚越による書き込みとの関係も調査，研究を進める必要がある。

7.　次稿で，塚越の SF 留学を扱うが，後半では，塚越を幕末維新留学生史にどのように位置づけるかという点にも触れたい。

本稿では，タムソン等の横浜在住宣教師研究者である中島耕二氏，江戸東京博物館職員で勝海舟の研究者である落合則子氏，横浜居留地での開業医ヴェダーの研究者である布施田哲也氏等，多くの研究者のお世話になった。ここに記し，御礼の言葉としたい。

《注》

（1）　NHK ニュース by 名字由来 net 全国名字めぐりの旅 第 143 回 群馬県（9）2017 年 8 月 3 日 8：30 公開。
https://mnk-news.net/detail.htm?page=2&articleId=374（2023 年 2 月 19 日，最終閲覧）

（2）　富岡牛松「金山松茸の今昔」（『上毛及上毛人』」187 号，1932 年 12 月）p. 27。

（3）　祖母チカ（伊勢崎高山氏の女）の高山家と，江戸時代の尊王思想家，高山彦九郎（太田市出身，1747-1793）の高山家との関係は不明である。

（4）　関山邦宏「昌平坂学問所書生寮入寮者について ── その数量的分析 ──」（『国府台　和洋女子大学文化資料館紀要』12 号，2003 年）pp. 1-17 参照。

（5）「懐徳堂本「昌平黌書生寮姓名録」（『懐徳』42 号，1972 年 10 月）pp. 21-84 を参照。林家の私塾には，横浜で塚原周造と合宿していて，塚越と交流があったと思われる長岡藩士小林雄七郎や，後に米国留学する千村五郎，仙台藩士一条十二郎の名前も見える。千村の米国留学に関しては，塩崎（2020 年 10 月）p. 81 参照。玉虫左太夫，薩摩藩士五代友厚，同上野景範，長州藩士木戸孝允，大村藩士長与専斎も林家で学んでいた。漢学塾であるが，後年，英学に進んだ少なからぬ人々がいる。塚越の出身地から近い館林藩からも松島貞吉，小橋多助，土屋勝蔵，田中謙三の 4 人が学んでいた。

（6）　伊東栄『伊東玄朴伝』（八潮書店，1978 年）。伊東玄朴の塾の様子は，吉田忠「柴田収蔵の蘭学修業 ──『柴田収蔵日記』に見る伊東玄朴塾 ──」（『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』12 号，2017 年）pp. 17-30 参照。

（7）　上州から新徴組に参加した上州人に関しては，堀田璋左右「新徴組と上州人」（『上毛及上毛人』127 号，1927 年 11 月）pp. 21-22 参照。江戸から上洛した時の浪士組の人数は約 250 人で，そのリストの中に塚越は見当たらない。堀田が作成した上州出身者のリスト 61 人の中にも塚越の名前は無い。新徴組に関しては，東京都総務局文書課「市中取締沿革：明治初年の警察」（『東京都市紀要』11 号，1951 年 11 月）pp. 30-34 参照。約 250 人の中で京都に残った者を新撰組，江戸に戻った者を新徴組と呼ぶ場合もある。

（8）　土佐博文「佐倉順天堂門人とその広がり　門人帳にみる門人とその史料をめぐって」（国立歴史民俗博物館研究報告，116 集，2004 年）pp. 255-274。塚越は，在江戸時代は良之助と名乗っていた。土佐は塚越，井汲，井坂に関して，太田や小浜に問い合わせ，断片的な情報を掲載している。pp. 270-272 参照。

（9）　塚原周造に関して利用した史料は次の 2 点である。山崎米三郎編『塚原夢舟翁』山崎米三郎，1925 年），鈴木秀幸「地方史と大学史 ── 茨城県千代川村における明治青年の夢を追って ──」『地方史研究』297 号，2002 年 6 月）pp. 1-21。

(10)　土佐によると，塚原は元治二年四月十四日（1865 年 5 月 8 日）に正式に順天堂に入門した。在学期間は 10 か月ほどであるので，1866 年 3 月頃まで学んでいたことになる。なお，『塚原夢舟翁』には，多少の年代の混乱が見られる。

(11)　後述するように，星の小浜藩雇用を祝った際に撮影されたものではないだろうか。『塚原夢舟翁』にこの写真は掲載されていて，「塚原 20 歳頃（1867 年）撮影」と書かれている。なお，『塚原夢舟翁』には，塚越は写真のみで本文では登場していない。

(12)　川口国昭，多田節子『茶業開化　明治発展史と多田元吉』（全貌社，1989 年）と，富津市のホームページ参照（https://www.city.futtsu.lg.jp/0000002685.html, 2023 年 2 月 19 日最終閲覧）。維新後は，15 代将軍慶喜とともに静岡に移り，茶の栽培の功労者として知られている。『金蘭簿物語』の巻末の附録には，インドにいる多田からの「塚越鈴彦先生」宛書簡が掲載されている（pp. 120-122）。

(13)　神奈川奉行所が採用した，警備隊員に関しては，西川武臣「神奈川奉行所の軍制改革 ── 集められた農民兵たち ──」（横浜対外関係史研究会，横浜開港資料館編『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』，東京堂出版，1999 年）pp. 185-215 を参照。これによると，下番は，警備員というよりは軍隊の兵員のような存在だった。

神奈川奉行所の職員名簿は慶應年間のものは残っていないので，当時の多田の役職や塚越の所属も確認できない。1863 年に，警備体制強化のため，下番を指揮，管理する定番が置かれた。塚越が横浜に来る 1 年前の 1864 年には，定番役は 700 人，下番は 1300 人いたという。1866 年 5 月（旧暦）には，定番役は別手組，下番は歩兵組へ配属となった。西川武臣「幕末から明治初年の横浜の治安と警備」（『幕末維新期の治安と情報』横浜開港資料館・横浜近世史研究会編，大河書房，2003 年）pp. 35-57 を参照。

(14)　渡辺清次郎（1847-1938）は四国塩飽諸島出身の幕府海軍で活躍した幕臣。『渡辺清次郎回想録』には，横浜運上所勤務についての記述は無い。橋本進「渡辺清次郎回想録について（前編）（『旅客船』260 号，2012 年 5 月，pp. 22-32），同「渡辺清次郎回想録について（後編）」（『旅客線』261 号，2012 年 6 月，pp. 9-21）参照。

(15)　アルウインは，1880 年代に駐日ハワイ王国弁理公使を務めたロバート・W・アーウィン（Robert Walker Irwin, 1844-1925）である。アーウィンは 1866 年に米国の郵船会社パシフィック・メール・スティームシップ（Pacific Mail Steamship Co.）の横浜駐在代理人として来日していた。

(16)　出典は三宅秀の回顧談である（福田雅代『桔梗 ── 三宅秀とその周辺』）p. 280。この三宅の発言に依ると，最上級クラスには，三宅，矢田部良吉，大鳥圭介，古屋作左衛門，藤倉健達，塚原周造の名前が挙げられている。

(17)　小玉晃一，敏子『明治の横浜　英語・キリスト教文学』（笠間書院，1992 年）pp. 57-58。

(18)　大槻文彦「大槻博士自傳」（『国語と国文学』5 巻 7 号，1928 年）pp. 914 参照。

(19)　この中には，後年欧米に留学した者が多い。会津藩士野口富蔵は，アーネスト・サトウの通訳・秘書となり，1869 年にサトウに伴いイギリスに留学した。姫路藩士長谷川雉郎は，大学南校留学生として，1870 年 10 月 23 日横浜発のチャイナ号で，元幕臣の目賀田種太郎等と米国に留学したが，ニューヨーク州のトロイで病死した。松江藩士の飯塚納は，1871 年にフランスに留学して，帰国後は自由民権運動家として知られた。彦根藩士鈴木貫一は，1868 年に米国 SF に留学し，翌 1869 年に帰国した。大井憲太郎は，大分県宇佐市の農家出身で，長崎で蘭学，英学を学んだ後に上京し仏学，化学を学んだ。林賢徳は，加賀藩士で，海軍を志して上京した。庄内藩士（羽州酒井）大井は不明。

塚原のグループとの関係は不明だが，塚原等が住んでいた東漸寺の近くに，「天沼の兵学校」と呼ばれた私塾が慶應年間に設けられた。農家の空き家を借りて太田源蔵（筆者注，太田源三郎か？）が開いた。兵学の傍ら語学の授業が行われ，オランダ語からフランス語，英

語へ変化していった。石井光太郎，東海林静男編『横浜どんたく　上巻』（有隣堂，1973 年）pp. 266–269 参照。なお，この東漸寺は，1900 年に，横浜市中区大平に移った。当該寺院関係者からは有効な情報は得られなかった。

(20)　塚越と星の住まいは，太田町の長家だったと『金蘭簿物語』に書かれている。星家の住居に関しては，『星亨とその時代 1』に次の 2 通りの記述がある。

- 渡辺顕哉談話：「吉田橋内入舟町の関門外」（p. 29）
- 渡辺牧太談話：「当時吉田橋内堤上に前面のみ地上に基礎を置き，後部は堤の斜面に木柱を以って支えたる仮屋同断の家屋両三点（ママ）ありき。そのうちの一はすなわち君の両親僑居したる所」（p. 33）

このそれぞれの住居についての位置情報が，一致するかどうかは確認する必要がある。高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝』（pp. 26–28）によると，横浜英学所の日本人教師，太田源三郎（1835–1895）も太田町に住んでいて，その役宅の庭に小屋を建てて仙台藩士の高橋是清と鈴木知雄，木村信卿の 3 人が，高橋の祖母の賄いで一緒に住みヘボン塾に通っていた。1866 年冬の大火事で太田町は全焼した。

(21)　石井重光「星亨　英学と近代主義」（『近畿大学語学教育部紀要』5 巻 1 号，2005 年 7 月）p. 20 に，「星の英学修学関係の史・資料が少なく，新たな実証的事実が見つけ出される余地はほとんどないことがあげられる」と書かれている。なお，本論稿の p. 24 では，塚越良之助（周造）と書かれていて，塚越と塚原の混同が見られる。石井の論稿は『金蘭簿物語』を引用した有泉著『星亨』を参照しているが，『金蘭簿物語』を参照した形跡，記述は無い。

(22)　小玉晃一，敏子『明治の横浜　英語・キリスト教文学』（笠間書院，1979 年）p. 37 に，星は最下級クラスだったと書かれている。出典は三宅秀の回顧談である（福田雅代『桔梗―三宅秀とその周辺』p. 280）。

(23)　小浜市立図書館所蔵の「明治三年分限名前帳」には，「洋学司　四十石　役料三人口塚越　酸素彦　洋学修業　小島　銓三郎，洋学修業　小澤　徳平，洋学修業　紅林　糾」とあり，日比野の名前は無い。何は日比野を星の弟子と言っているが，前島の談話によれば日比野は前島の弟子で，星の当時の年齢（十代後半）を考えれば前島の弟子の方が，可能性が高い。

(24)　星の小浜藩雇用について，『星亨とその時代 1』では次のようにまとめている。

> 「たまたま若州小浜藩酒井（忠禄）侯藩地に洋学を興さんと欲し，藩士池田政吉氏をして洋学者を四方に求めしめ，これを聘廷せんとす。ここにおいて予て先生（筆者注，星亨）に英語を学び居たる同藩士日比野勉氏並びに塚原周造氏等先生に小浜行きを慫慂し，何君またこれを賛成し，同時にまた塚越良之助氏（のち酸素彦また鈴彦），先生を池田氏に紹介したるより明治元年二月小浜藩に禄仕することを得たり。」（p. 44）

諸々の談話を紹介しつつ，塚越も星雇用に一役買っているとしている。有泉のこの辺りに関する記述も「当時，小浜藩は英学者を求めており，塚越は，上役の池田正吉に星を紹介して，慶應 4 年 2 月，星は小浜藩に雇われることになった（塚原の談話では別の人物の紹介だったという）」（『星亨』p. 14）と，まとめている。

星研究者にしてみれば，星の小浜藩への紹介者の確定は，余り重要では無く，研究者も拘泥していなかったのだろう。いずれにしても，内容が異なる談話を，史料として扱う際，かつての歴史研究者は，どのように処理したかという点で参考になった。

(25)　山田みどり「幕末・明治初期の宣教医の活動 ── 宣教医ヘボンを中心に ──」（『社会福祉学』58 巻 4 号，2018 年）pp. 1–13 の 3. ヘボンの施療事業（p. 6）を参照。

医師の子弟でヘボン塾に学びながらも，医学修業を希望しなかった林薫（1850–1913）のような例もある。林は，塚原や塚越が師事した，順天堂始祖の佐藤泰然（1804–1872）の五

男である。塚越や塚原の師，佐藤尚中（1827–1882）は泰然の弟子，その後養子で，泰然の後を継いだ。

林はまずアメリカ商館ウオルシュ・ホール商会の庶務・会計担当のウエルマンから指導を受け，次にジョゼフ彦に英語を習った。そして 14 歳でクララのヘボン塾に入学する。林は優秀な生徒であり，夫ヘボンも含め家族同様の付き合いをしていたようで，ヘボンの日常生活の様子もよく知っていた。林に関しては，権田益美「幕末期から明治初期の横浜開港場における英語の学習 ── 林薫一族を事例に ──」（『港湾経済研究』50 号，2011 年）pp. 139–148 を参照した。三宅にしても林にしても，塚越と異なり，生れた家と育った環境が恵まれていた，稀有な例である。

(26) ヴェダーには，画家として有名なエリュー・ヴェダー（Elihu Vedder, 1836–1923）が弟にいて，彼に宛てた書簡が当時の日本の様子を知らせる貴重な史料となっている。布施田哲也「Alexander Madison Vedder の生涯について」（『日本医史学雑誌』60 巻 2 号）p. 144 と寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ヴェッダーに関する新事実」（『神緑会ニュースレター』7 巻 4 号，2016 年 3 月）pp. 17–24 を参照した。

三宅はヴェダーのもとで 3 年間学んだが，最初は「代診兼薬局生」という身分で，アレンという米国人の薬のブローカーの店に間借りして薬剤師のような仕事をしていた。ヴェダーからは，化学，動物学，解剖学，内科学，外科学，眼科学等を学び，化学に関しては，最初ヴェダーからフォスターという化学の本をもらった（三浦義彰『文久航海記』（篠原出版，復刻版 1988 年，pp. 84–85 参照）。ここでは，「フアウンスの化学書」，「グリフィス・ケミカル・レリリエーション」といった英書が，当時の代表的な化学書として登場する。塚越がこのような化学に関する英書を読み，後年，小浜藩主酒井家に寄贈した可能性はあるが，酒井家文庫の目録には見当たらない。酒井家文庫に関しては，塩崎（2022）参照。

(27) オランダ人医師ドクトル・マイルに関しては，今後の史料調査が必要である。斎藤多喜夫『幕末・明治の横浜　西洋文化事始め』（明石書店，2017 年）の第 6 章「健康を求めて」には横浜居留地在住の医師や病院についてまとめられているが，マイルについては触れていない。p. 147 にオランダ海軍病院が 1866 年 6 月に山手に設けられたと書かれているが，マイルの病院は，もっと早い時期から開業していた。

(28) 海外移住 150 周年研究プロジェクトの調査結果（『遥かなる「ワカマツ・コロニー」』，彩流社，2019 年）によると，海外旅券勘合簿神奈川県之部と於開港場免状相渡候航海人明細鑑に，「鈴彦」という名前が記載されている。それぞれの記述は以下の通りである。

- 「海外旅券勘合簿神奈川県之部：免状番号 319, 29 歳。出身地は横浜北仲通四丁目森兵衛店，身分・職業は高橋屋小兵衛弟，渡航理由は米国商人ゴブル小仕としてサンフランシスコへ。」（p. 98）
- 「於開港場免状相渡候航海人明細鑑：出身地は横浜北仲通四丁目嘉兵衛店高橋ヤ，身分・職業は小房弟，渡航理由は米人ゴブル小仕被雇，発行日は庚午五月二十三日，返納年月が六年十月四日，年齢 31。」（p. 110）

年齢等，細かな点で違いはあるが両方とも米人ゴブル小仕となっている。

(29) 1869 年に小浜藩は英式兵制を導入し，軍務所という部署が開設された。田中清「小浜の英学」（『舞鶴高等専門学校紀要』15 号，1980 年）pp. 103–108, 参照。p. 106 には，英学の必要性から，東京にいた井汲収，井坂静太郎，日比野政柄等を小浜に迎えたという記述がある。3 人とも本稿既出で，塚越と浅からぬ縁がある小浜士族である。

(30) 『塚原夢舟翁』p. 10。

参考文献

【基調文献（重要度順）】

塚越丘二郎『金蘭簿物語』（著者発行，1929 年）。

野沢鶏一 編著，川崎勝，広瀬順晧 校注『星亨とその時代 1』（平凡社，1984 年）。

有泉貞夫『星亨』（朝日新聞社，1983 年）。

山崎米三郎編『塚原夢舟翁』（山崎米三郎，1925 年）。

【その他の文献】

秋山勇造「研究の周辺 幕末・明治初期に外国人が発行した邦字新聞⑵ ベイリーの『万国新聞紙』」（『神奈川大学評論』38 号，2001 年）pp. 91-94。

荒井保男『日本近代医学の黎明』（中央公論新社，2011 年）。

石井光太郎，東海林静男編『横浜どんたく　上巻』（有隣堂，1973 年）。

石井重光「星亨　英学と近代主義」（『近畿大学語学教育部紀要』5 巻 1 号，2005 年 7 月）pp. 19-57。

伊東栄『伊東玄朴伝』（八潮書店，1978 年）。

大槻文彦「大槻博士自傳」（『国語と国文学』5 巻 7 号，1928 年）pp. 38-52。

海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー」』，彩流社，2019 年）。

「懐徳堂本「昌平黌書生寮姓名録」（『懐徳』42 号，1972 年 10 月）pp. 21-84。

川口国昭，多田節子『茶業開化　明治発展史と多田元吉』（全貌社，1989 年）。

草間俊郎「横浜の英語教育機関―幕末維新期・明治期における公認諸学校」（『英学史研究』9 号，1976 年）pp. 23-31。

小玉晃一，敏子『明治の横浜　英語・キリスト教文学』（笠間書院，1979 年）。

後藤斉「洋学者としての大槻文彦」（東北大学大学院文学研究科講演・出版文化企画委員会編『ハイブリッドな文化』東北大学出版会，2019 年）pp. 77-119。

権田益美「幕末期から明治初期の横浜開港場における英語の学習 ── 林薫一族を事例に ──」（『港湾経済研究』50 号，2011 年），pp. 139-148。

同「横浜開港場における英語教育 ── ヘボンを介して開設した「横浜英学所」（郷土神奈川，55 号，2017 年）pp. 16-32。

斎藤多喜夫『幕末・明治の横浜　西洋文化事始め』（明石書店，2017 年）。

酒井シズ「良斎と秀」（福田雅代『桔梗 ── 三宅秀とその周辺』福田雅代，1985 年）pp. 20-33。

ジェームズ・バラ著，飛田妙子訳『ジェームズ・バラの若き日の回想』（キリスト新聞社，2018 年）。

塩崎智「1872 年 3 月 26 日横浜発サンフランシスコ行き，アメリカ号日本人渡航者の調査 ── 先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ」（『拓殖大学　人文・自然・人間科学研究』44 号，2020 年 10 月）pp. 75-107。

同「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）関連史料調査報告 ── 於福井県福井市，小浜市」（『拓殖大学　人文・自然・人間科学研究』48 号，2022 年 10 月）pp. 116-135。

鈴木秀幸「地方史と大学史 ── 茨城県千代川村における明治青年の夢を追って ──」『地方史研究』297 号，2002 年 6 月）pp. 1-21。

関山邦宏「昌平坂学問所書生寮入寮者について ── その数量的分析 ──」（『国府台　和洋女子大学文化資料館紀要』12 号，2003）pp. 1-17。

高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝』（中央公論社，1976 年）。

田中清「小浜の英学」（『舞鶴高等専門学校紀要』15 号，1980 年）pp. 100-122。

寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ヴェッダーに関する新事実」（『神緑会ニュースレター』7 巻 4 号，2016 年 3 月）pp. 17-24。

東京都総務局文書課「市中取締沿革：明治初年の警察」（『東京都市紀要』11 号，1951 年 11 月）pp. 30–34。
土佐博文「佐倉順天堂の門人とその広がり　門人帳に見る門人とその史料をめぐって」（『国立歴史民俗博物館研究報告』116 集，2004 年）pp. 255–274。
富岡牛松『金山太田誌』（富岡書店，1934 年）。
同「金山松茸の今昔」（『上毛及上毛人』187 号，1932 年）p. 27。
中島耕二「宣教師デビット・タムソンの生涯 ── 誕生から日本基督一致教会の創立までを中心として ──」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』35 号，2002 年 12 月）pp. 225–275。
同編，日本基督教団新栄教会タムソン書簡集編集委員会訳『タムソン書簡集』（教文館，2022 年）。
西川武臣「神奈川奉行所の軍制改革 ── 集められた農民兵たち ──」（横浜対外関係史研究会，横浜開港資料館編『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』東京堂出版，1999 年）pp. 185–215。
同「幕末から明治初年の横浜の治安と警備」（『幕末維新期の治安と情報』横浜開港資料館・横浜近世史研究会編，大河書房，2003 年）pp. 35–57。
西脇康『幕末大江戸のおまわりさん　史料が語る新徴組』（文学通信，2021 年）。
橋本進「渡辺清次郎回想録について（前編）（『旅客船』260 号，2012 年 5 月）pp. 22–32。
同「渡辺清次郎回想録について（後編）」（『旅客線』261 号，2012 年 6 月）pp. 9–21。
福田雅代編発行『桔梗 ── 三宅秀とその周辺 ──』（岩波ブックセンター信山社，1985 年）。
布施田哲也「Alexander Madison Vedder の生涯について」（『日本医史学雑誌』60 巻 2 号）p. 144。
堀田璋左右「新徴組と上州人」（『上毛及上毛人』127 号，1927 年 11 月）pp. 21–22。
三浦義彰『文久航海記』（篠原出版，復刻版 1988 年）。
茂住實男「横浜英学所（上）」（『大倉山論集』29 号，1991 年 3 月）pp. 235–268。
同「横浜英学所（中）」（『大倉山論集』30 号，1991 年 12 月）pp. 59–90。
同「横浜英学所（下）（『大倉山論集』32 号，1992 年 12 月）pp. 125–165。
山田みどり「幕末・明治初期の宣教医の活動 ── 宣教医ヘボンを中心に ──」（『社会福祉学』58 巻 4 号，2018 年）pp. 1–13。
吉田忠「柴田収蔵の蘭学修業 ──『柴田収蔵日記』に見る伊東玄朴塾 ──」（『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』12 号，2017 年）pp. 17–30。

（原稿受付　2022 年 10 月 26 日）